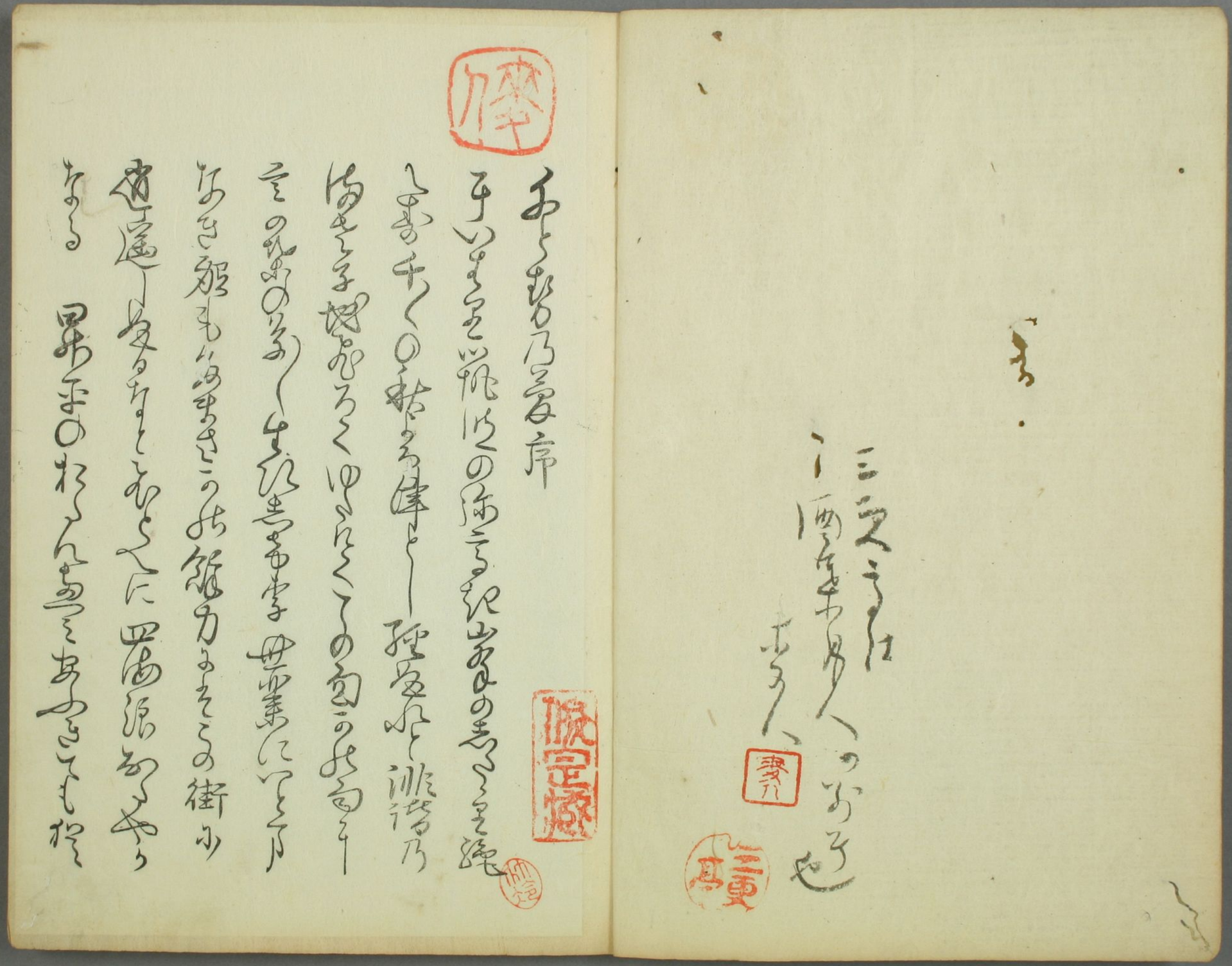
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

中村俊定文庫
文庫 18
729



序

懷古
仮定懷
懷古

あるとき[illegible]色一ぴき[illegible]生[illegible]
乃[illegible]の[illegible]
北海の[illegible]
千歳亀[illegible]
性を[illegible]
武の[illegible]
為[illegible]
又[illegible]

都[illegible]山[illegible]
[illegible]一亀を[illegible]
[illegible]
[illegible]風[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
の[illegible]井中に車輪を

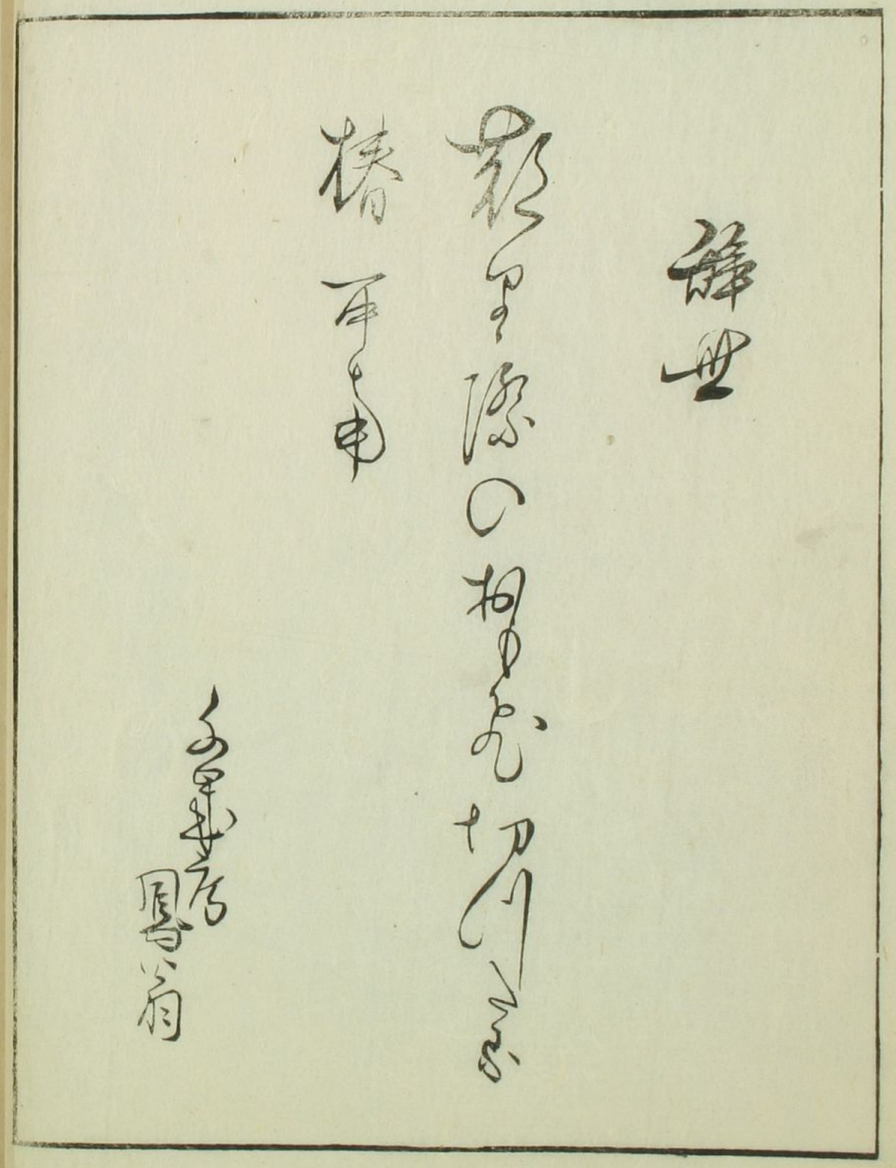
投せすの労なくして帰路を忘れけるに
乃滞あまた人をまねき 呼集まりの色
いろにしかし 聊かなきれる事あらし
にん我か遅き老の身の宝暦戊午の
年臘月中の六日の暁臨終の一句をおし
しこの西上人の詠吟もちかみやや
其後は僧雲子 聊か後に年かさね西方
の旅人となりぬ 此子明石の出路に

文なき塚を建て 浄写法華経の塔中 ちいさく書る
作あるを志す 是日 後に周忌すゝむ年
七周りの忌辰のそなへて 猶むかしの句を忘れぬ
ため 師の吐き棄てし句を書とて ふたゝび記す
を中よき句としてまとめたり 傍らに集めて
梅本の艸雕り 蕉風子の追福の一章をも
勧進して毛少冊となし 聊か末に添ぬ
此子の風情をまつ思ひ 六師の庵号に

たゞ〳〵拙き子どもの筆とて
濫筆を弄する事とゝ笑ひ給へ

于時文化改元甲子孟春日

[illegible]



千とせ賀歌集

千果居鳳翁發句選稿

千樹養蓋賀

千旭居朱明著

春の部

海士の手業から浮き出て玉の表
なるまでとゝ一言見元花乃春
ゝ見れば手振りける若葉哉

山もりに花さむ時や梅の色
梅の香を訪ふ人や白菊を

実盛の墓を思ひ出でて根芹の香
ふり捨てし世の柳さくらかな
眼二つ目鼻もありても公卿の形
まゆ引き帽子の鹿子の庚申
初午や幟の数の多田小屋
当代の世の脊摺りいとまなし

いとまなく時や雛の
もてなしの御馳走の椀の色
地獄とは何ぞ汐干狩
のちの人の老のかなしさや夕さくら
吾国の如くなるや見ぬ山
吹く風を笑へば梅の屋根坂

[illegible]乃部

[illegible]の[illegible]新[illegible]

[illegible]子の[illegible]

紫の[illegible]

箏や[illegible]

[illegible]花や[illegible]

[illegible]

義仲[illegible]

[illegible]子を[illegible]世[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]たち[illegible]

[illegible]子[illegible]

人形[illegible]

又[illegible]

[illegible]

柳[illegible]

[illegible]

日照りあり[illegible]に沈つき[illegible]

[illegible]中国[illegible]

その[illegible]の[illegible]

[illegible]

あら[illegible]

白ちゝみ　[illegible]神[illegible]を雪所

[illegible]の[illegible]

[illegible]

都[illegible]の[illegible]

秋の部

[illegible]の日の[illegible]の秋

[illegible]の秋[illegible]

秋風を[illegible]

[illegible]の[illegible]

あし深る　短冊書さもちかへにけり

紐して手向る真らぬ字の露

高舩や飛んでしらむ露の末

稲妻や六かくへ見えき堂の松

いなつまや助よりよるるぬるさ宮

葦手唱へる妙茶の子売り

気あかきつるし小僧を探る虫の声

西米の穂手ちつまつる

鶉　一の那

みやこ寂深井より秋の夕なり竟

蜀細の中に声する あかし　一あ

小雨の琴子

蓑取り小姓あやしき持して雲扇

二羽り一層飛ぶ一の月子の月

子の月いいこと雲のすみの玄

名月ら ろくの月の出させ遠さ

名残や唖も一声あきれ一升

宮家と共に於て中自然宮乃
伯倍經俊卿のもとに侍りたのもる時に
春日やまとうの風雅に備のもと伯倍
もとへ一さ別れのもとに又重て花
梅よりもをみなへしを折て
ふりよりもむ作り
伯耆を若しやもの曇除の花
春の柴の雪の雪こそ石の月

さくらを別り新古今一の十三
伯耆人の春のかををはなる
ホトトギス一筋の文字よりよりとろる
冬の部
寶をはるとも一里少も等雨
ぬ久しとて春こそ中やさよ明る
ホトトギスあらよ春の撞樓を
さくら風ふる人て落る所

関戸に別れし かはらぬ夜半の空に
猶の形見に抱し りとの小袖を着る
法に近くて 師の法に 落髪せしのみ
門ありし身にあらしに也 雪の夜
雪折やのかゝる 木枕の夕明り
云ざまや志き 新鴬としの宿
定家卿のむかしの衣の縁ゑし
もららく

庵を始る文けも懐年忘れしみ

梅の題仙

虫喰の梅折りに継ぐ枝垂かな　鳳朗
仮宿の霜や中々見ゆるさ
志んしとそり 絵の春寒くて
何もいはずとも 梅の月

羽やすめ〳〵鳴る暑さに吹かるゝ方
もさ鈴乃音のならさ
ウ
武士の後ともなりて行くに山
程よき宿の関を越ゆ
松の葉のたえぬかざしの玉まくの
中緒とみる横をとなへる撫之
人の心の見ゆるに恐れ歸りしき
思も五も嘆ためのよそなれ

さつきの祝いせらるゝもいふとき
園の桜さき庭を拝める
去歳とも賑はしあゆみき幸きの時
左右田畑に浮さる賑はしき
月まての神の利に愛る筆にしるせ
夜を楽しむ山彼の帯
ナ
寵の火も絶えしうちに笛の音
夕に伸るに鳴る鶯乃声

八

元政の春元に呈する句偶つくる
多くの花――重の初物
遠きるこゝろ花咲かもあり
夢も感慨多し家雀をきく
家内家族皆病を病まざる
初午の祭をきゝ
春の宵の中信の矢先の系
こゝろ張の際入り

稲荷梅運の夢より加佐ら郎
梅若忌
雲雀雲の中に雲雀の中に雲雀
雲雀を追ひ雲を追
雲雀鳴く家の戸を開く
関の戸を開く明るきの夜
神籠を見れば生まれる物たち
みやこ――こゝろで若草――

[illegible]追福事

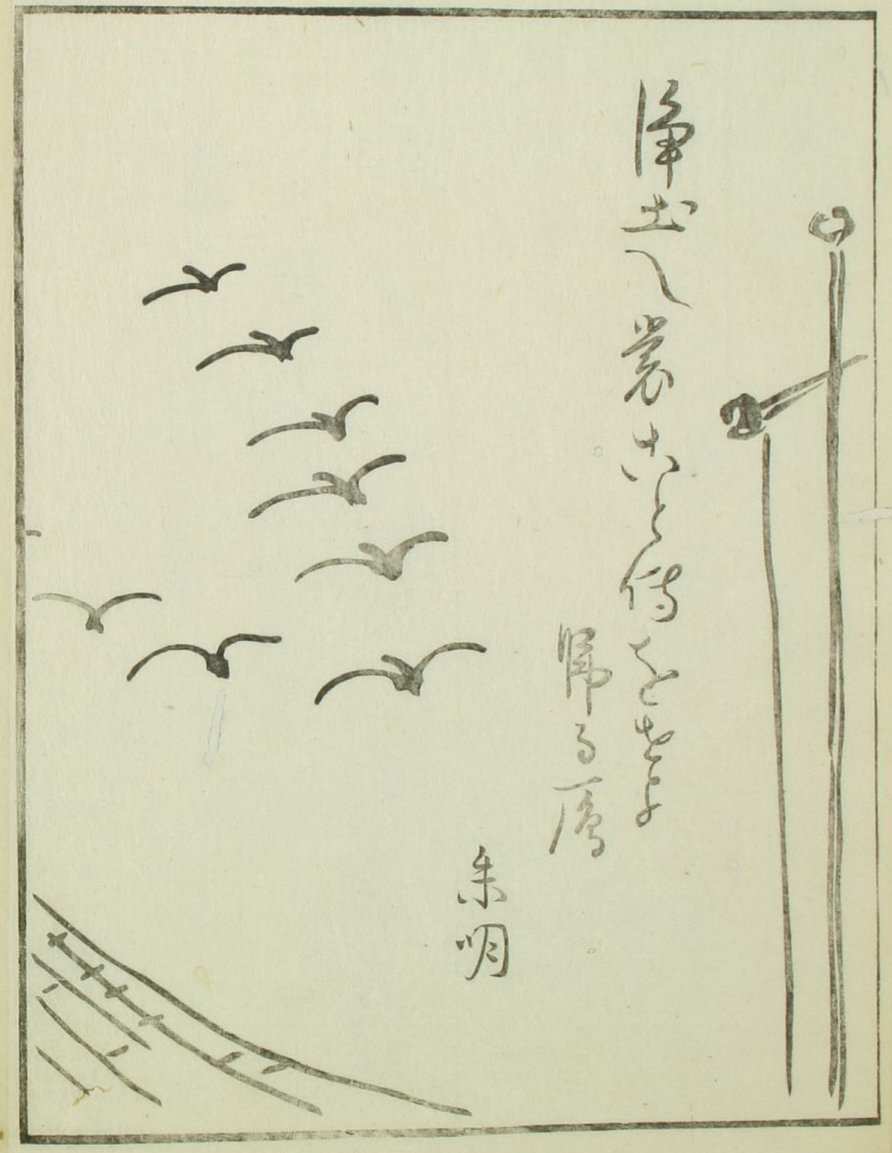
風雨祠宗の七回忌

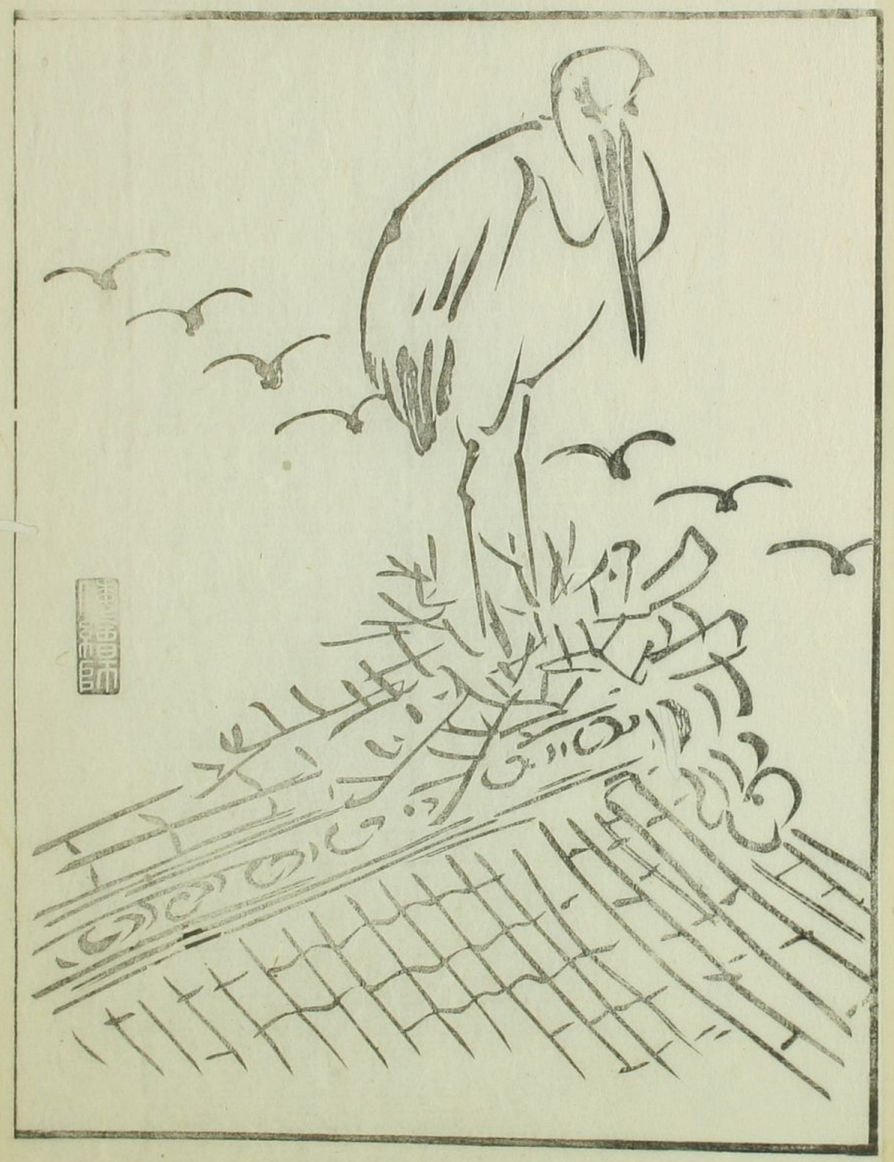
[illegible]一味法雨を[illegible]の雲 層龍

○

[illegible]佛[illegible]

[illegible]


陣立て岩たゝかを
帰る雁
糸明



是非男ニ[illegible]
一句をこの集[illegible]

夕踊や吉田の中の男ぶり　羽州本庄 巴龍

まきの子ありさらんのこゑさへ夏かな　素川

きしてあふむさても茶ハ少妹かな　野鶴

きの代の鳥やの色の佛の夜　千秉

一声をこゑ霰鶯乃ふもとのをり　鶯堂

翁桜河く七茎乃茶筅買り　其三居

みしらぬこゝろにかなふあさ人の
句挿の句に入れられたる

志ら露乃出年や峯の何ま枝　公生

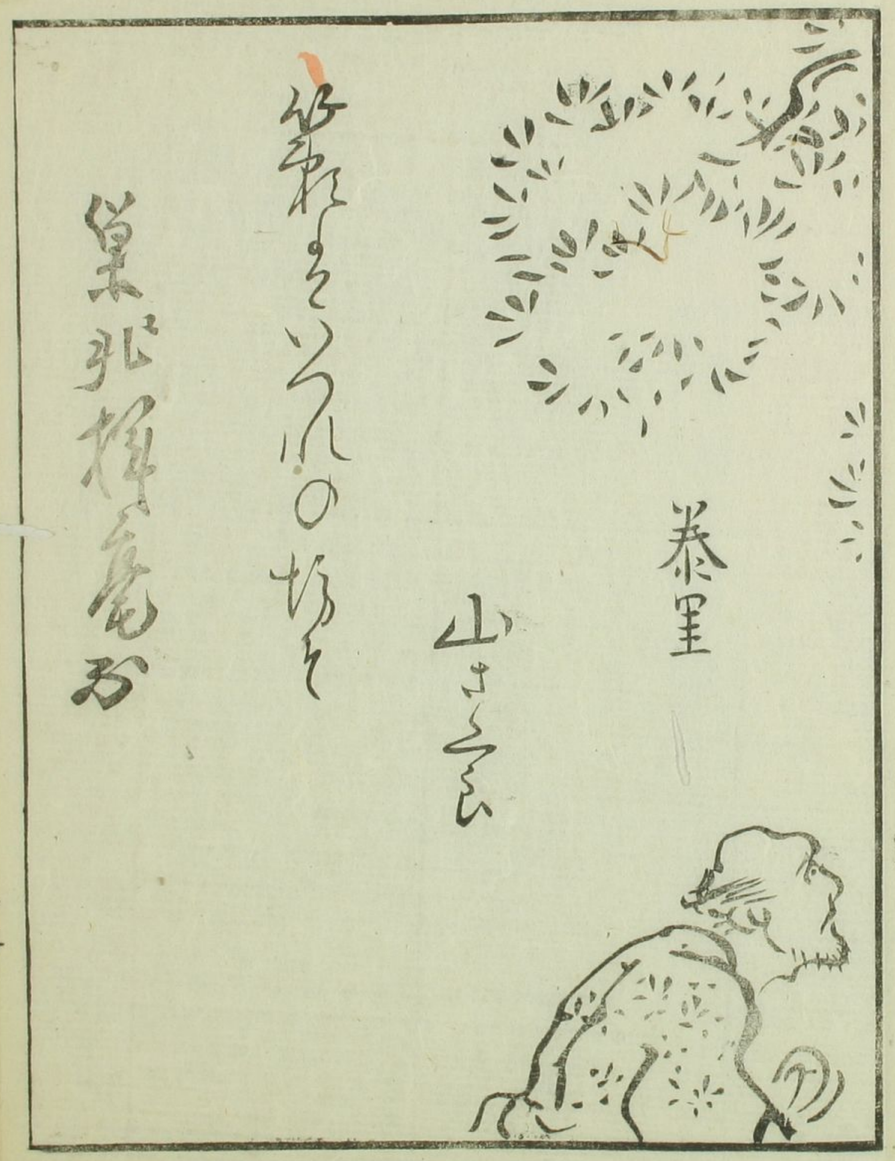
まのまくしのこもや七年乃宿の客　浄文

数月ま文名乃家るかと桜みゆ　宗里

山鳩の面影かしきゆかしてゝ　五明

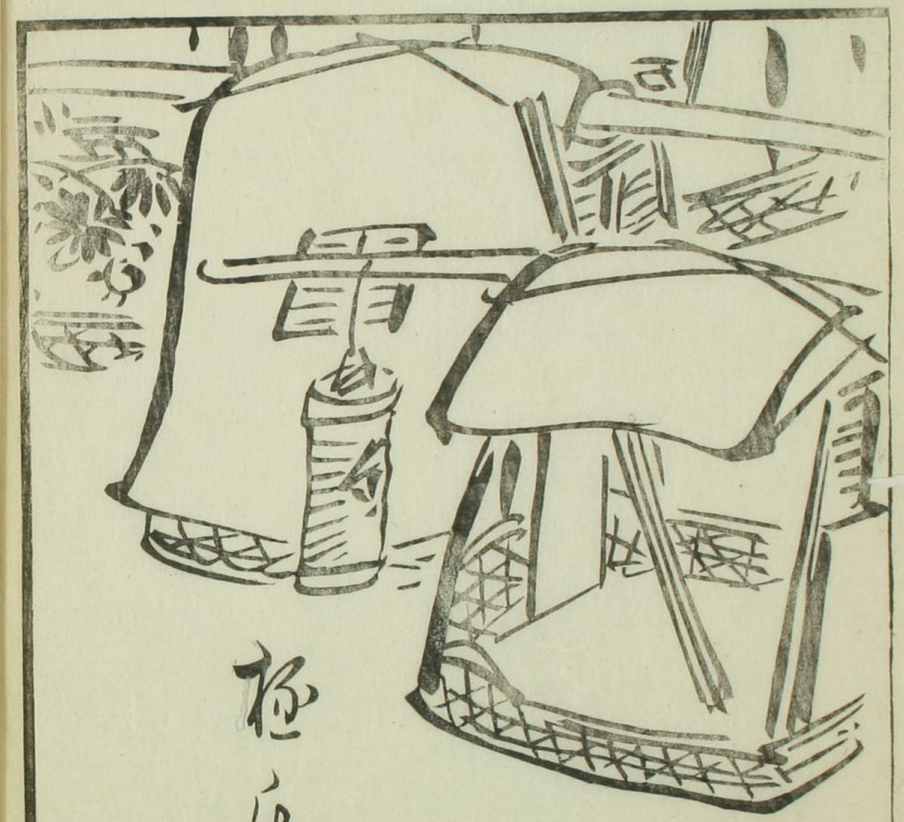
鳴子の音さ深く岩の上　勢州 月帆

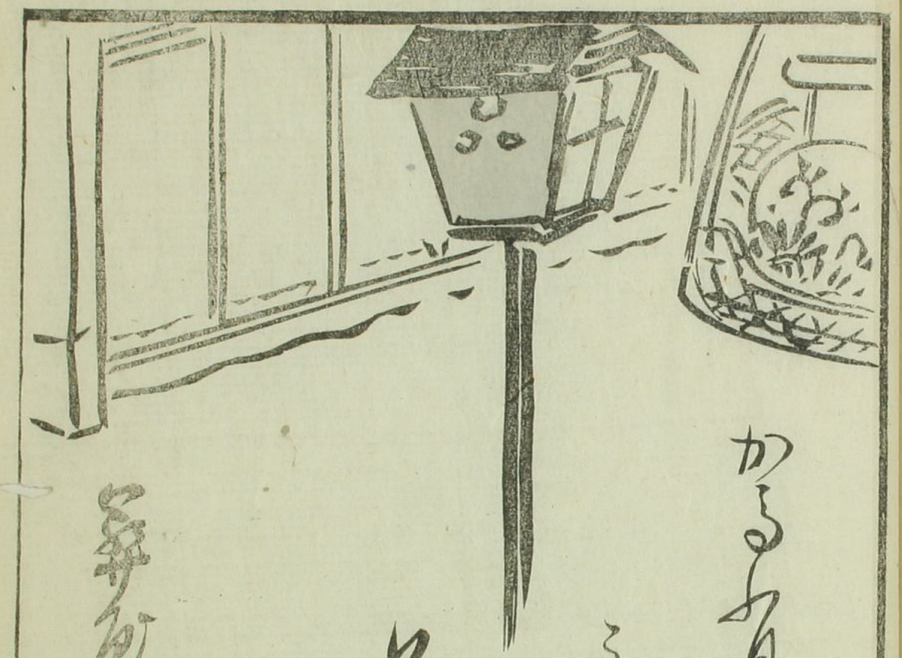
身もとまや桜の中の無賃家　如綾


恭星
山さん
菓子をいろいろ
菓子屋

御宮ちかむりの山さくら　堂阜
光陰の矢とやとしや八重桜　子祥
宮山乃ちるく沙や　七めくるる　素也
さくらの花ちる枝やとしや七曲り　巨泉
雪のさくや　七年の月日　無秀
月雄子の仏をあるの中や　不移
松の新七夕川て　紅さくら　里之

年暮れて新綿とみるよ七回忌　冬西
秋寒る桜葉をもの昔ふり　南湖
鶯もの春をたのもる人そも　巨周
宗こ七夕　墨もちや寒今に　翠雨


将軍
極楽へ


かゝる者
ゑの江戸

相模国鎌倉郡七郷山住人仏師
ものまねの目をもつぱらや 彫刻是 三信
仏をたつとぶの。道の日乃根ぶ 七十八度 拝ま
ずしもあるべし。ものまねの色 七十五歳 時習
風を教るその日をもつぱら暦にあり 四月
未詳一回無に帰し 蛙 沿價
今も相模の国の下 ものまね

ものまねを今年はもつぱら山さとにあり かなしき
七年の歴史のうちあるべし 兩 巻之
万物をやはらぐるの乃根ぶ 重量
金銀宝の帝都の国ぶ 千貫
本蓮寺 既年 合の周分のもの 少ぶ
十六歳の月中はものまねに 呼 子孫
相模乃月新潟 汐見双樹 かなし

萬年長春
君井の水千
峯の花
春丘

[illegible]　　由雅

[illegible]　　[illegible]

七夕[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　霍宇

仙[illegible]

そつ[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

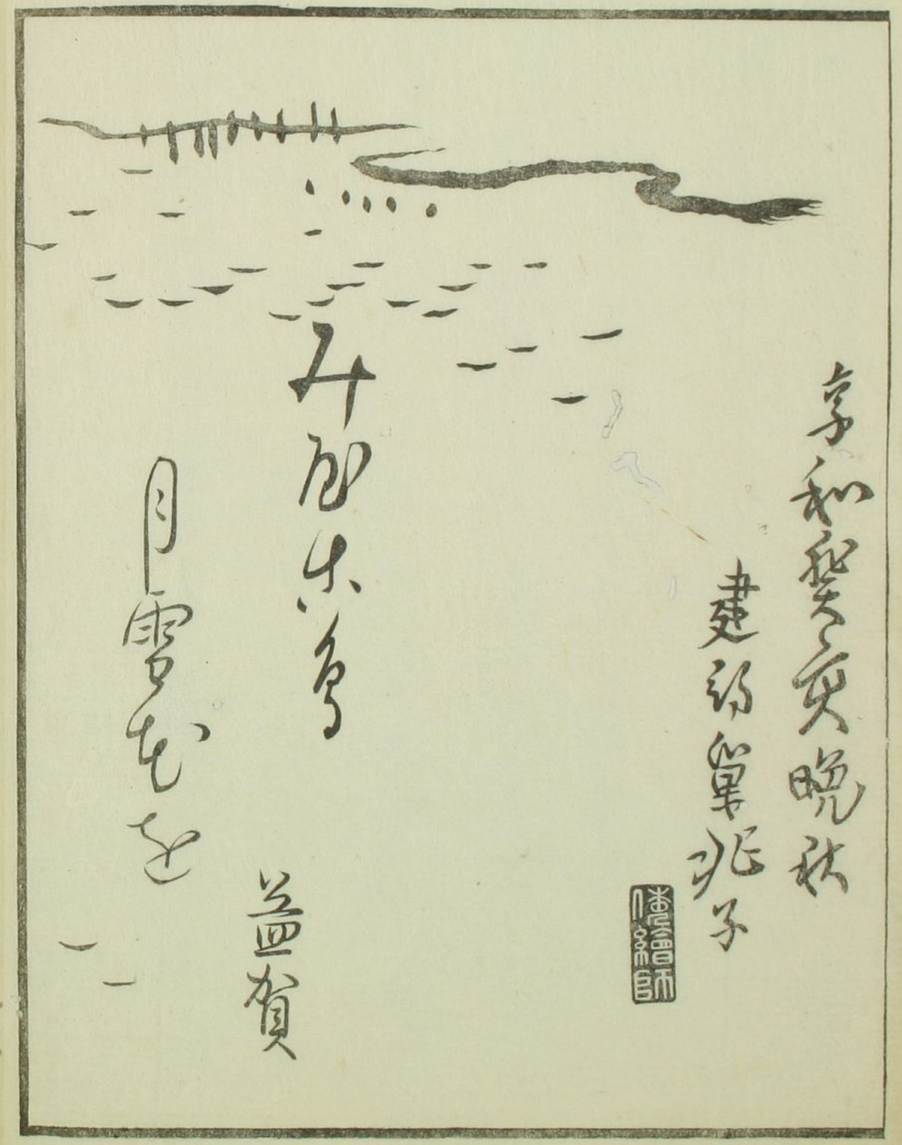
[illegible]　　[illegible]

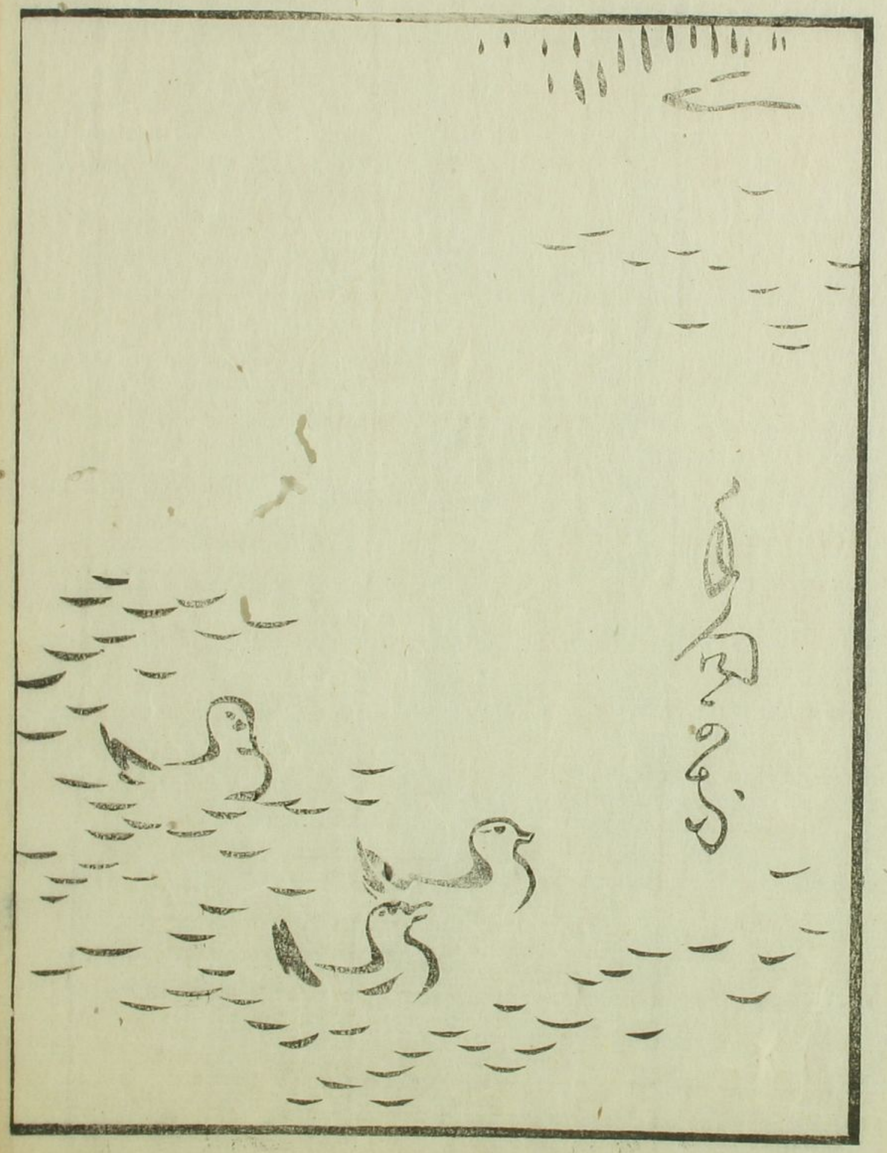
[illegible]　　[illegible]

宗梅

桜花しかるべんのもとの匂ひ　女　兼也
散るもの山のさくらば　日　雪月
年々の桜さくや　七年忌　日　この秋
七年のあとてもむかしの昔　五蓮
散るとしよりまさるは桜　女　巴也
花を禁じて白雪七色にてらさ
ぬ咲くや　浮世半の仏の金　素行

肥をあるちかをとおもふ年　雪紙
年毎年ふるや　蓮の水現事　玉延
ちりとはいふ　ちるく蓮花　女　こりの子
御仏相一とよりたとへば大乗
涅槃の像を画くに　もとりて
ふるとめ月やうの日　ふるれば
明き就の是藻　涅槃の画　木谷


享和癸亥晩秋
建仙單水子
月照水面
雪光
益賀



○

もやきのといろやホの芽の七草葉　川　久万女

人おもひたちのそらも秋月　女　紫人

七夕の夕ぐれやたゝミ月　門　勝義

○

七夕とそ空も知るや星雲　女　早苗

追加

おもひ草の葉に見えるる七曲屋　雲多

○

四の時年の夕やなるも　其角

七四や花は雲　湖十

○

七夕ゝゝゝれ水仏の星月　徒流

○紀元の年惠[illegible]七年の夢見[illegible]　曲[illegible]
敬[illegible]を動[illegible]て[illegible]　存年
[illegible]年　[illegible]る[illegible]の事　本[illegible]

○

初[illegible]年[illegible]　[illegible]　巢[illegible]

[illegible]福の[illegible]ちとも
[illegible]を出禮をさらはる
刻[illegible]を[illegible]の[illegible]なりし
得[illegible]色[illegible]日[illegible]の[illegible]なら[illegible]
例の[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]風[illegible]

あふのましにかゝる於ちら手本とれる
形を年ころ好みこのちなみ
とやしきん和流蒲東流のまゝやさ
しくも古のうつくしく深川く駒を
雛え外されとともにまるうしく深く
万葉の卿子作り縁さハ人界の事し之
ゆくすゑのいかく保のあやさからん私

あらゆん了ほさるふ幸ひなる人にゆるして
乃木の法一つらあらふ事ゆるして あらぬ路

文化甲子やよひ中の六日

金沢左白馬街
酔雨亭主人
[illegible]書

墅

星野力